

チームくまもと活動記念誌

～2016年より西原村と歩んだ5年～



中央大学ボランティアセンター公認学生団体

チームくまもと

2021年4月

目次

はじめに	2
第1章 震災発生から現在に至るまでの西原村の記録	3
第2章 チームくまもとの活動記録	9
第3章 現地の方から	14
西原村地域支え合いセンター 後藤 由香莉さん	14
ボランティア支援者 片山 明人さん、秀子さん	16
現地ボランティア 宇治 努さん	18
小森村営住宅(旧小森仮設団地A棟)自治会長 鈴川 将司さん	20
第4章 卒業生、現役の学生の振り返り	22
チームくまもとでの活動を振り返って 木村 亘佑(2016・17年度代表、2018年度法学部卒業生)	22
チームくまもと活動記念誌発刊に寄せて 大谷 夏子(2018年度文学部卒業生)	24
復興支援で得た気付き 恵良 友貴(2018年度文学部卒業生)	25
私のチームくまもとでの4年間 藤原 凌(2018年度代表、2020年度経済学部卒業生)	26
ボランティア活動から学んだこと 横山 直輝(2020年度法学部卒業生)	27
西原村でのボランティア活動で感じたこと 吉田 圭吾(同上)	28
チームくまもとでのボランティア活動を振り返って 藤野 将希(同上)	30
チームくまもとでの活動を振り返って 滝澤 佑介(2019年度代表、経済学部4年生)	31
団体の収束とコロナ禍での活動	
保崎 翔太(2020・2021年度代表、経済学部3年生)	
西村 柚衣香(2020・2021年度副代表、文学部3年生)	
佐藤 百夏(2020・2021年度副代表、法学部3年生)	32
第5章 顧問の先生方から	35
チームくまもと顧問として 宮本 航平(中央大学法学部教授・チームくまもと顧問)	35
阿蘇を仰ぎ見て 平山 令二(同上)	35
西原村と関係者の皆さまに感謝します	
中澤 秀雄(中央大学法学部教授・2015-2020年度中央大学ボランティアセンター長)	36
一人ひとりの想いが詰まったチームくまもとの活動	
開澤 裕美(中央大学ボランティアセンター コーディネーター)	36
編集後記	37



はじめに

本冊子は、2016年4月に発生した熊本地震をきっかけとして発足した中央大学ボランティアセンター公認学生団体「チームくまもと」の団体としての活動収束に際してこれまでの団体の活動記録と私たちの活動場所である西原村の移り変わりをまとめたものです。第1章から第5章までの構成となっており、時系列を追って西原村の移り変わりやチームくまもとの活動記録を振り返っていくことは勿論、現地の方々や活動を行ってきた学生、そして顧問の先生とボランティアセンターのスタッフの方々にも振り返りをして頂くことで様々な視点から西原村とチームくまもとについて振り返り、記録することができるのではないかと考えました。

まず第1章では、西原村についての基本情報、並びに熊本地震の概要と西原村においての影響を述べた後に、震災以降の移り変わりについて年表形式で記録しています。

次に第2章では、チームくまもとが発足するに至った経緯と実際に行ってきた活動について記録しています。また、本章では年表だけでなく年度ごとに写真を用いたり、その年度の状況や流れ、重要な点等について冒頭に説明を加えたりすることによってより詳細にチームくまもとの活動について記録することができたと考えています。

第3章では、現地での活動の際にお世話になった方々にアンケートの方式を取り、チームくまもとの活動について振り返って頂きました。皆さんに同じアンケートを行い、その内容をそのまま掲載することによって同じように思っていたことやそうではなかったことなどの様々な声を記録することができたと思います。

第4章では、卒業生の方々と現役の学生による振り返りを掲載しました。内容を細かく指示せず書いた為、書き方や考え方、学年や役職など、様々な部分における違いを反映した多種多様な振り返りとなりました。また、ここまでの各章では、章ごとの担当者の振り返りも掲載しています。

第5章では、顧問の先生方、並びにボランティアセンターのスタッフである開澤さんにチームくまもとの活動を振り返って頂きました。

本冊子が西原村の方々やチームくまもとの活動してきたメンバーにとって振り返りとともに両者を繋ぐ記録となり、他の大学生やボランティアに携わる、もしくは携わろうと持っている方々に役立つのであれば幸いです。また、本冊子の作成や日頃の活動において助成金という形でご協力を頂いた、中央大学学員の皆様、Gakuvo様、Yahoo! 基金様、大塚商会ハートフル基金様には心より感謝申し上げます。

最後になりますが、西原村の皆様のご健勝を祈念申し上げますとともに、これまでチームくまもとの活動にご理解とご協力を頂きましたことに心より御礼申し上げます。

中央大学ボランティアセンター公認学生団体 チームくまもと 一同

第1章 震災発生から現在に至るまでの西原村の記録

第1章では、被災地（西原村）における震災当時の被害状況及び震災発生以降から現在（2021年2月現在）までの復興の様子を年表形式で記録する。なお、本誌掲載事項は我々チームくまもとが掲載必須事項だと判断したものとなっており、必ずしも現地の動向を余りなく記録するものではない。

<西原村の位置> 出典：<https://www.mapion.co.jp/smp/map/admi43.html>



<西原村の詳細図> 出典：熊本県阿蘇郡西原村-Yahoo! 地図



- A：河原公営住宅
- B：小森仮設住宅
- C：山西公営住宅
- D：「風の里」キャンプ場
- E：萌の里

＜西原村における震災の被災状況＞

※西原村ホームページ「西原村の被害の状況」（2020年10月5日に作成されたもの）、
「広報西原 2021年2月号」より作成
higaijoukyou.pdf(vill.nishihara.kumamoto.jp)（2021/2/4 最終アクセス）
R3.02.pdf(vill.nishihara.kumamoto.jp)（2021/2/12 最終アクセス）

・熊本地震

本震及び主な前震と余震は以下の通りである。

主な前震	2016年4月14日	21:26	M6.5	震度6弱
	4月14日	22:07	M5.8	震度5強
	4月15日	00:03	M6.4	震度5強
本震	2016年4月16日	1:25	M7.3	震度7
主な余震	4月16日	01:44	M5.4	震度5弱
	4月16日	01:46	M5.9	震度5強
※震度1以上の余震回数は4484回(2018年4月30日まで)				

・人的被害 ※2020.9.30 現在

死亡5人、関連死4人、負傷者56人(内訳：重傷者18人、軽傷者38人)

・避難所 ※公的避難所のみ

2016年11月18日避難所閉鎖(避難者0人に伴い)

※ピーク時避難所5箇所にて1,809人が避難(2016.4.17 20時) 避難所は最大6箇所開設

・建物被害

全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	計
512棟 (20.7%)	201棟 (8.1%)	664棟 (26.8%)	1,097棟 (44.3%)	2,474棟
※村内2,474棟の内、1,377棟の建物が全半壊(55.7%)				

・解体

申請1,772棟解体済1,772棟 進捗率100%
(公費926棟/自主846棟) ※2018年10月完了

・応急仮設住宅 ※2020.9.30 現在

現在312戸(内訳：木造50戸、プレハブ262戸)

みんなの家4棟、談話室3棟 ※集会施設7棟

小森仮設団地は第1団地～第5団地(A棟、B棟、C棟、D棟、E棟)

【最大時】307戸に301世帯841人が居住

【現在】30戸に29世帯75人が居住(B棟のみ)

・みなし仮設住宅 ※ 2020.9.30 現在

【最大時】 194 世帯 557 人

【現 在】 6 世帯 19 人が居住

内訳：村内 /5 世帯 16 人 村外 /1 世帯 3 人

前月比：村内 /0 世帯 0 人 村外 /0 世帯 0 人

・災害公営住宅

【山西団地】 2018.2.24 着工、8 月 17 日完成、8 月末より入居開始

【河原団地】 2018.2.1 着工、6 月 10 日完成、7 月から入居開始

・地震当初と現時点の人口比較

2016.4.16 現在人口 7,049 人、世帯数 2,652 世帯

2020.12 末日現在人口 6,749 人、世帯数 2,695 世帯

(人口△ 300 人、世帯数 43 世帯)



年表中に出てくる※がついた施設名や用語の解説は左の QR コードまたは以下の URL より確認できる。

<https://note.com/kirokushu/n/n4462f8ccded5>

< 2016 年関係年表 >

日 付	内 容	出 典
4 月 14 日	熊本県立大学学生ボランティア活動開始 避難所解放	応援くまもと 熊本地震 (被災地向け情報)
4 月 16 日	日赤からの臨時救護所開設要請 給水支援開始	同上
4 月 18 日	避難所開放規模縮小	同上
4 月 29 日	小森第 1 仮設団地 50 戸着工	応援くまもと 熊本地震 (被災地向け情報)
5 月 18 日～ 31 日	応急仮設の第 1 次募集分 (木造仮設の 50 戸)	広報西原号外 災害臨時第 9 号
6 月 1 日～ 5 日	応急仮設の第 2 次募集分 (プレハブ仮設 252 戸)	同上
6 月 7 日	被災建物の解体、撤去支援制度の受付開始	広報西原号外 災害臨時第 12 号
6 月 12 日	小森西(下小森、新所、緑ヶ丘、西原) 被災建物の解体、撤去支援制度の受付開始	同上
6 月 30 日	小森第 1 仮設団地 入居開始(第 2 期) JASSO 支援金申請期限	応援くまもと 熊本地震 (被災地向け情報)
7 月 2 日	仮設住宅(木造 50 戸、プレハブ 252 戸合 わせて 302 戸)が完成	広報西原号外 災害臨時第 14 号
7 月 9 日	小森第 2,3,4 仮設団地 入居開始	熊本日日新聞 2018 年 9 月 30 日
8 月 1 日～ 5 日	仮設住宅の第 3 次募集開始	広報西原号外 災害臨時第 16 号
8 月 27 日	俵山交流館萌の里仮店舗再オープン	朝日新聞 2016 年 8 月 28 日朝刊 「被災直販所、再起 仮店舗がオープン 西原村の萌の里 / 熊本県」

日付	内容	出典
10月3日	西原村支えあいセンター訪問活動開始	熊本地震デジタルアーカイブ
10月14日	※「ましきラボ」開設	熊本大学ましきラボホームページ
10月28日	買取型災害公営住宅整備による基本協定調印式	熊本地震デジタルアーカイブ
11月8日	小森第5仮設団地 入居開始	熊本日日新聞
12月16日	※「みんなの家」完成	くまもとアートポリス
12月22日	俵山トンネルルート（県道熊本高森線）の復旧工事完了	広報西原 2017年2月号

< 2017年関係年表 >

日付	内容	出典
3月20日	※「萌の里」全館営業再開	広報西原 2017年4月号
4月13日～28日	※「災害公営住宅」の入居相談	広報西原号外 災害臨時第19号
4月14日	山西、河原両地区で計80戸の測量開始	朝日新聞 2017年4月14日朝刊
10月10日	災害公営住宅の建設戸数が57戸に決定 山西地区は45戸、河原地区は12戸 両地区ともに集会場を設ける	朝日新聞 2017年9月13日朝刊

< 2018年関係年表 >

日付	内容	出典
2月1日	災害公営住宅河原団地着工	西原村(2020) 「西原村の被害の状況」
2月22日	山西公営住宅仮契約締結調印	熊本地震デジタルアーカイブ
3月19日	災害公営住宅入居の個別説明会 (B棟にお住まいの方@b棟集会所)	広報西原号外 災害臨時第20号
3月20日	災害公営住宅入居の個別説明会 (A棟にお住まいの方@A棟集会所)	同上
3月22日	災害公営住宅入居の個別相談会 (D棟にお住まいの方@D棟集会所)	同上
3月23日	災害公営住宅入居の個別相談会 (C,E棟にお住まいの方@C棟集会所)	同上
6月10日	村西部の河原地区向けの計12戸が完成、落成式	朝日新聞 2018年6月12日朝刊
7月6日	河原第2団地の12棟のうちの10棟の入居開始、鍵の引き渡し式	朝日新聞 2018年7月7日朝刊
7月18日	県道熊本高森線俵山ルート桑鶴大橋復旧完了	広報西原 2018年8月号
8月14日	山西公営住宅完成	熊本地震デジタルアーカイブ
8月15日	山西公営住宅落成式	同上
8月25日	山西公営住宅住宅説明会	同上
8月28日	山西公営住宅鍵引き渡し式	同上
11月13日	西原村村民グラウンド復旧	広報西原 2019年1月号

< 2019 年関係年表 >

日付	内容	出典
1月28日～31日	小森仮設団地(312戸)の集約による説明会	広報西原 2019年3月号
4月10日	※「風の里キャンプ場」営業再開	広報西原 2019年6月号
4月14日	仮住まいは約1万6500人(約7300世帯)残っている(4月14日時点)	朝日新聞 2019年4月14日朝刊 「仮住まい、なお1万6500人 熊本地震きょう3年」
8月3日	俵山大橋復旧	広報西原 2019年9月号
9月14日	大切畑大橋、大切畑ダム橋復旧 俵山トンネルルート全線開通	広報西原 2019年10月号
12月7日	小森仮設団地復興祭り@構造改善センター	広報西原 2020年1月号
12月12日	12月中にA棟から村営小森団地になった場所に37世帯55人が入居予定、プレハブのB棟に49世帯56人が入居予定	令和元年 第4回西原村定例会会議録 p.15

< 2020 年関係年表 >

日付	内容	出典
1月26日	県道熊本高森線(益城町杉堂～河原)が開通	広報西原 2020年3月号
5月12日	西原村総合体育館建設工事起工式 2021年9月完成予定	熊本日日新聞 2020年5月13日
9月30日	B棟30戸に29世帯、75人が居住	西原村(2020) 「西原村の被害の状況」
12月7日	B棟には20数件が残っている状況	鈴川さんへのヒアリング 2020年12月7日

本章担当者振り返り

チームくまもとに入った理由として、現地でのボランティア、直接住民の方と関われる点に魅力を感じたからです。初めて西原村を訪れた時は緑が多く、山を近くで感じたことを覚えています。私にとって現地での活動は数回でしたが、毎回、住民の方の笑顔を多く見られたことが私にとって大変心に残っています。また、活動前後のミーティングでは、それぞれの考えを率直に伝え合う環境があったからこそ、今のチームくまもとがあると振り返りをして感じております。

西原村の温かさを肌で感じられた経験や団体の先輩、同級生と過ごした時間は私にとって素敵な大学生活の一部になりました。ありがとうございました。

総合政策学部3年 加藤 星来

私はボランティア活動に興味があり、誰かの役に立ちたいと思ってこの団体に入りました。そして私は、チームくまもとに参加して実際に現地に行くことでしかできない経験をしました。特に住民さんとの会話を通じて現地の声を聞く機会に恵まれてよかったです。少しでも自分たちの活動が役立ったのであれば、嬉しいです。現地の方々は、震災の記憶が風化していくことが悲しいとおっしゃっていたので、風化させてはならないと感じました。私は、現地の方々の役に立ちたいと思って参加したこのボランティア活動を通してむしろ自分自身が成長することができました。

経済学部3年 高野 雄人

私がボランティアセンターの公認学生団体であるチームくまもとで活動したいと思ったきっかけは、何か役に立つことをしたいと思ったからです。

そのような漠然とした思いで始めたボランティア活動で、私は初め、何をしてあげられるだろうという思いで取り組んでいました。しかし、西原村への訪問を重ねるたびに、その思いは全く違っていたことを思い知らされました。流しそうめんのイベントや、戸別訪問などを通し、必要とされていることは何か、私たちに何ができるかを考え行動することは新たな思考や気づきをもたらしてくれました。何かをしてあげる、どころか、ボランティアを通し、自分自身が成長させられたのです。

チームくまもととして活動できたことは、大学生活において貴重な機会であり、非常に有意義な時間であったと思います。西原村の皆様と関わることができて、本当に嬉しく思います。あたたかい時間をありがとうございました。

法学部3年 小寺 ちひろ

私がボランティアをしようと思ったのは、もっとたくさんの人と関わって自分の視野を広げたいと考えたからです。被災された方とお話させていただいたり、仲間と様々なことについて話し合ったり、初めは分からないことばかりでしたが、先輩方の一生懸命な姿や優しいアドバイスで、活動に積極的に取り組むことができました。また、自分が思っていることを言語化し、相手に伝えることの難しさを知りました。だからこそ、自分のおもいが仲間に伝わった時、一から考えたものが形になった時の達成感は忘れられないほど大きいものでした。

そして、私が一番感じたのは、人と人のつながりのあたたかさはものすごい力を持っているのだということです。この団体に入らなければ全く関わることのなかったくまもとの方々。しかしそこに、相手のために「何かしたい。」というおもいがあれば、それは現地の方々の心に届き、笑顔にすることができます。居場所をつくることができます。これが私がくまもとでの活動を通して得たいちばん大きなものだと思います。ありがとうございました。

商学部3年 渡邊 理那

私は、チームくまもとに入り、2年間で2回現地に行きました。現地での活動は、自分の中で得るものは多く、また、楽しい時間を過ごすことができました。現地活動以外の活動はすべてミーティングであり、現地での活動をより良いものにするため、団体内で試行錯誤しました。課題を踏まえての目標決めは抽象的になりすぎず、かつ、成果がわかるものでなければならなかったため、議論は困難を極めました。しかし、自分の意見を発表し、他人の意見を聞きそれを一つにまとめ上げるという過程は、在学中なかなか経験できるものではないと思うので、いい経験だったと自負しています。楽しかったです。ありがとうございました。

法学部3年 松本 幸大

第2章 チームくまもとの活動記録

<2016年度 設立の経緯>

2016年4月の熊本地震発生後、中央大学は月に一回のペースで有志の学生を募り、熊本県阿蘇郡西原村で活動をしてきた。本活動は中央大学のボランティアセンター主導の下行われ、活動を重ねていくうちに次第に参加する学生のメンバーが固定化し、更に継続的に活動していくことにより被災地における課題意識も学生間で共有されることとなった。そこで、学生主体での活動を展開することを目指し、学生団体を設立するための話し合いが始まった。焦点としては、第一に現地の方との目に見える関係性が出来てきたということである。第二に、西原村の小森団地に支援が行き届いていないことが訪問活動によって把握することができ、そしてその問題にどう対応すべきであるかという学生間の認識が明確になったからである。第三に、中央大学ボランティアセンターが主導する活動である場合だと、学生が行いたい活動を学生自身で企画しにくいなど、活動の自由度（学生の主体性）が制限されるからである。第四に、毎月の活動をボランティアセンターのスタッフの方々が企画することは、その方々への負担が大きく、継続的な活動が難しくなるためである。

そして「チームくまもと」は、熊本県出身の学生や、東北で活動する他の中央大学ボランティア学生団体での経験を持つ学生など計3名が中心となって正式に団体として発足した。その際、ボランティアセンター主催で活動していた際の活動名称であった「チームくまもと」をそのまま団体の名称として使用することにした。また、団体の発足と並行して、現地でのどのような活動をすべきなのか検討するため、他大学のボランティア活動の視察も行った。この時期の活動内容は以下の通りである。

時 期	内 容
4 月	熊本地震発生
5 月	チームくまもと、活動開始…避難所での足湯活動、熊本県庁にてヒアリング、火の国会議への参加
5 月～10 月	この間、月に一回程度の活動を行う…避難所、仮設住宅での足湯活動（西原村）、農業ボランティア（西原村・菊池市）、熊本学園大ボランティア活動の視察（益城町）、被害視察（益城町・西原村・南阿蘇村）
10 月	多摩キャンパスにてボランティア活動写真展、説明会
10 月・2 月	中央大学内ブース、イオンモール多摩平の森にて被災地支援物産展
3 月	事前調査（今後の活動に向けて）…西原村住宅でのお宅訪問、熊本県立大学のヒアリング、熊本学園大学とテクノ団地にて協働、益城町木山中学校のヒアリング



2016年
5月21日
現地活動時

＜2017年度 小森仮設団地での活動＞

2016年6月以降、各市町村において応急仮設住宅への入居が進んだ。西原村においても、6月17日から応急仮設住宅への入居が開始し、2016年11月18日には避難所がすべて閉鎖された。2016年度までの視察の結果、震源地に近く被害が大きかった西原村にある小森仮設団地では他の学生による支援が手薄であることなどが判明したため、チームくまもとは小森仮設団地を活動の拠点とすることに決めた。

2016年3月の事前調査をもとに、2017年度の初めに団体の理念を決定し、団体の方向性が定めた。小森仮設団地における活動の当初は、全戸への訪問活動を行い、住民の状況を把握するとともに、事業を展開していた地域福祉協議会やボランティア活動を行っていた個人への情報提供も行っていった。また、小森仮設団地で活動するにあたって、地域社会福祉協議会との信頼関係の構築には重きを置きながら活動を行った。

その後、地域社会福祉協議会や他のボランティアの方々などと協力し、子どもたちの遊び場づくりや、多世代間交流、住民間の関係構築を目指したイベントの開催などを行った。宿泊場所については、小森仮設団地に近接する片山さんのご自宅の一面を提供して頂いた。現地における活動以外にも、中央大学ホームカミングデーでの物産展実施、写真展での活動内容発表等も行った。

また、団体の組織的な面を見ても当初の3人から、多数の新入生をメンバーとして迎え、活動を拡大させた時期であった。この時期の活動内容は以下の通りである。

時 期	内 容
7月	西原村訪問…地域社会福祉協議会のヒアリング、子ども食堂のお手伝い
9月	西原村訪問…地域福祉協議会へのヒアリング、小森仮設団地にて全戸への訪問活動、集会所でのイベント実施（お茶会、水鉄砲を使った遊び）
11月	西原村訪問…地域社会福祉協議会へのヒアリング、子どもの遊び場（小森仮設団地内のキックボード場）づくりのお手伝い、地元のお祭りのお手伝い
12月	西原村訪問…地域社会福祉協議会へのヒアリング、子どもの遊び場づくりのお手伝い、小森仮設団地でのクリスマスパーティーのお手伝い
1月	西原村訪問…地域社会福祉協議会へのヒアリング、小森仮設団地にて全戸への訪問活動、集会所とキックボード場でのイベント実施（流しうどん・竹細工・昔遊び）
2月	西原村訪問…地域社会福祉協議会へのヒアリング、「のぎくまつり」に参加
3月	西原村訪問…地域社会福祉協議会へのヒアリング、小森仮設団地にて全戸への訪問活動、集会所とキックボード場でのイベント実施（チーズフォンデュ）



2017年
7月8～9日
現地活動時

< 2018 年度 公営住宅への活動開始 >

2018 年度には山西、河原という二つの公営住宅への入居が始まった。その結果、自宅の再建による流出も相まって小森仮設団地の入居者は減少していった。小森仮設団地での活動を中心としていたチームくまもとは二つの公営住宅での活動を見据え、各公営住宅の自治会長へのヒアリングを実施した。

また、夏活動時には小森仮設団地において、子どもたちを対象としたイベント活動も行った。

時 期	内 容
8 月	地域社会福祉協議会へのヒアリング、小森仮設団地と河原公営住宅での訪問活動、子どもたちの交流を目的とした遊び場でのプール活動
10 月	中央大学ホームカミングデーでの物産展実施、写真展での活動内容発表
12 月	地域社会福祉協議会へのヒアリング、自治会長へのヒアリング、小森仮設団地と山西公営住宅での訪問活動
3 月	地域社会福祉協議会へのヒアリング、自治会長へのヒアリング、小森仮設団地、山西公営住宅、河原公営住宅での訪問活動



↑ 2018 年 現地夏活動イベント



↑ 同年 10 月 物産展

< 2019 年度 活動収束への道のり >

2018 年度から引き続き小森仮設団地と山西・河原の 2 つの公営住宅における訪問活動やヒアリングを行い、その後の活動について検討した。そして 9 月の夏活動では、小森仮設団地と河原公営住宅にてイベントを実施した。また、2019 年度には新入生が 10 名以上加入し、それに伴って現地活動やミーティングなどの規模も変化した。

そのような中、仮設住宅の集約やそれに伴うイベントの参加者の固定化、さらには全ての活動場所において訪問活動に応じて頂ける方が減少したことなどがきっかけとなり、団体のメンバーが考える活動内容や目的、現地の状況の予測などが実際の状況と異なってきていると認識し始めるようになった。そして 9 月の夏活動をきっかけに団体としての方向性についての議論が始まった。

はじめは被災地支援活動から地域おこし活動に変えるといった声もあがっていたが、11 月に方向性を決めるための情報収集活動を行い、そこで得られた情報などをもとに改めて検討し、その結果、団体としての活動は収束させることに決定し、実際にはその旨を現地の方々に説明するなど、団体としてすべきことを行った上で活動を収束させることに決まった。しかし、3 月に行う予定だった春活動は新型コロナウイルスの影響により断念せざるを得なくなった。

時 期	内 容
6 月	現地活動（事前調査・スタディーツアー）…ヒアリング、訪問活動（小森団地、山西・河原公営住宅）、震災遺構見学
9 月	現地活動（夏）…ヒアリング、訪問活動（小森団地、山西・河原公営住宅）、イベント（小森団地：流しそうめん & お茶会 山西公営住宅：だご汁パーティー & お茶会） ※団体の活動内容や目的、予測などが現実の状況と乖離していることを認識（ex. イベントの参加者の固定化）→団体としての活動継続に疑問、以降、現地や大学でのミーティングの議題を「団体の方向性について」に定めて議論
11 月	現地活動（事前調査）…ヒアリング（現地のニーズや団体の収束、新たな方向性など、団体の方向性に関わる情報を収集）
12 月～2 月	11 月活動での情報収集を踏まえ、団体の方向性について議論→団体としての活動を収束させることに決定
3 月	現地活動（春）中止



2019 年
現地夏活動イベント

< 2020 年度 コロナ禍における収束活動 >

2020 年度に入ってから新型コロナウイルスによる影響を受け、2019 年度に決定していた現地での活動を行うことができなかった。しかし、コロナ禍においても団体の方向性を変えることはせず、お手紙の郵送やビデオ通話でのご挨拶、活動収束の説明など、コロナ禍における世の中でも行えることから進めていった。

依然として新型コロナウイルスによる影響は続き、中々その出口を見出せていない。しかし、再び西原村で活動ができるようになれば、もう一度現地の方々にお会いしてお話をしたいと思っている。

時 期	内 容
4 月	春学期開始（オンライン授業への変更）
5 月	コロナ禍を踏まえて収束、残りの現地活動回数や内容について再度議論
7 月	現地へ手紙郵送
8 月	現地活動（夏）断念
10 月下旬～11 月初旬	お世話になった現地の方々へオンラインでの収束報告
11 月中旬	記録集作成開始

第3章 現地の方から



西原村地域支え合いセンター 後藤 由香莉さん

1 チームくまもととはどのようなきっかけで関わるようになりましたか。
→2017年に、支援の申し出をいただいたことがきっかけだったと思います。当時は木村くん、大谷さんが主となり活動をされていました。

2 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。(活動内容について)
→私自身も社協の災害ボランティアセンターや支え合いセンターとして、大学生の方と接してきましたが、西原村の仮設の住民の方が、どのような状況で、何に困り、何を必要としているのかをしっかりとヒアリングをされたことが印象的でした。活動については、そのヒアリングがとても生かされていたと思います。

3 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。(学生の姿勢・態度について)
→こちらの実情をきちんと聞き取って下さる。電話やメールでのやりとりや直接お会いしても挨拶からしっかり丁寧。とても感心しました。

4 チームくまもとが行った企画の中で最も印象に残っているものを教えてください。
→仮設D棟でされたプール企画でしょうか。

5 4.で回答した企画が最も印象に残っている理由を教えてください。
→地震の影響で小学校のプールが使えない中、夏休みでパワーがあり余った子ども達にとって、とてもよい経験になったのではないかと思います。私が直接様子を見に行っただけではありませんが、子ども達のニーズにぴったりとはまった企画だったのではないのでしょうか。

6 企画以外で印象に残っている瞬間を教えてください。
→日頃のやりとりですかね～。

7 6.で回答した事が印象に残っている理由を教えてください。
→とにかく落ち着いていて、しっかりとこちらの話に耳を傾けてくださいました。必ず定期的に連絡を下さるところも安心でした。

8 先日、チームくまもとの活動収束の報告を聞いた際の率直な感想を教えてください。
→そういう時期に来たんだな～と感じました。

極端な例ですが、とある支援者の方から「人が集まらないのは、支え合いセンターの声の掛け方が悪い」と言われたことがあります。支援の引き際は難しいと思います。支え合いセンター側からお世話になっている方々に「もう支援は必要ありません」とは言いづらいものです。やはり仮設の実情だったり、

住民の方に必要か・必要とされているかは私たち支え合いセンターも含めて考える必要があります。その見極めをととても慎重にされているなと感じました。また、収束に向けての計画やこちらへの報告もきちんとしていただけるのは、さすがチームくまもとの皆さんだなと感心しています。

ただ今年はコロナもあり、計画どおりにいかず、悔しい思いもされたことと思います。

9 東京から大学生がボランティアとして何うことについて率直なご意見をお聞かせください。

→本当にありがたい限りです。その一言に尽きます。私が学生の時は、自分や友達、バイトが優先で、誰かのために動くということはほとんどできませんでした。

チームくまもとの皆さんは、行動力とチームの方全員のお人柄が素晴らしく、感謝の気持ちでいっぱいです。

ヒアリングの際に小森仮設住宅の状況を教えて頂くなど、私たちが活動しやすいよう時間を縫ってサポートをして頂きました。ありがとうございました。



ボランティア支援者 片山 明人さん、秀子さん

1 チームくまもととはどのようなきっかけで関わるようになりましたか。
→ 支え合いセンターで勤務中、先輩の木村さん他が訪ねてこられて宿泊をあちらこちらに泊まっておられる様だったので、自宅を紹介しました。ここから皆さんとのお付き合いになったと思います。

2 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。(活動内容について)
→ 最初は少人数でしたから次第にチームくまもとの先輩方の良さに導かれて入って来られる方が多くなったのかなと思います。
活動内容は良く分からなかったですね!

3 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。(学生の姿勢・態度について)
→ 出かける時、帰ってきた時、大きな声で挨拶がしてほしかったかな?
(少し恥ずかしい所もあったかも)

4 チームくまもとが行った企画の中で最も印象に残っているものを教えてください。
→ その日にどんな企画があるのか分からなかったので代表の方が内容を教えてもらったら良かったかな?

5 4.で回答した企画が最も印象に残っている理由を教えてください。
→ 仮設訪問、河原団地訪問、山西団地訪問では皆さんとの会話をとても喜んでいらっしゃいました。子どもたちとのプール遊び、ソーメン流し、直接見てないけど喜んでいなあと分かり、うれしい気持ちになりました。

6 企画以外で印象に残っている瞬間を教えてください。
→ 県庁に行ってルフィ像と対面～!!
東海大の被災現場を見に行ったそうですね。幅広く活動しているんだなあと感動しました。

7 6.で回答した事が印象に残っている理由を教えてください。
→ 帰ってきて、反省会かな、内容は分からないけど夜遅くまで勉強して、感心というか感動していました。

昨年の誕生日カード他、今回のフォトアルバム、感動、感動、素晴らしい。チームくまもと、本当に心やさしく、まじめでいい仲間ですね。

8 先日、チームくまもとの活動収束の報告を聞いた際の率直な感想を教えてください。
→ やっぱり活動中止だよ。来ていただいて、コロナを持ち帰っていただいてもダメだし、こちらに持ってきていただいてもダメだし、心が痛むので良かったかな。

西原村では先日1人感染がありました。引越されて今は0です。近隣では毎日の様に1人はありますよ。

9

東京から大学生がボランティアとして何うことについて率直なご意見をお聞かせください。

→震災からもうすぐ5年になります。やっと復興が見えてきました。西原村の総合体育館も2021年7月頃には完成予定です。大切畑ダムは4年後、住宅(布田、古閑、大切畑他)は完成に近づいています。コロナが収束したら皆さんで復興状況をみていただきたいですね。

チームくまもとのボランティアの方々はずばらしいです。是非おいで下さい。

皆さん、体調に気を付けて卒業まで頑張っ

活動での宿泊場所を提供して頂くとともに、下小森地区の地域住民の方々との接点も作っていただきました。ありがとうございました。





現地ボランティア 宇治 努さん

1 チームくまもととはどのようなきっかけで関わるようになりましたか。
→初めてお会いしたのは西原村の生涯学習センター「山河の館」で子どもたちを対象にした学習支援をしていたときに同じ西原村で支援活動を行っていた小島浩子さんに紹介していただきました。

私は子どもたちの遊び場づくりを小島さん含めたくさんの方たちと計画していたところで、そういった企画にも興味があるということでチームくまもとも活動できるスタートの場にもなりました。

2 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。(活動内容について)

→子どもたちの学習支援やみんなで遊ぶイベントなど、自分にはあまりできないことをするのはとても素晴らしいと思いました。子どもたちも被災者で、学校や公園、いつもの生活が一変した中で少しでも前を向いて笑うことができるきっかけ作りとして子どもたちと接している姿はとても良い印象です。

3 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。(学生の姿勢・態度について)

→良くも悪くもマジメだなという印象でした。何事にもマジメに取り組みマジメに楽しんでマジメに悩んで、被災者の方ともマジメに話をし、とてもいい印象だと思います。その中にも個性があり個々に違うマジメさがあって良いと思います。

4 チームくまもとが行った企画の中で最も印象に残っているものを教えてください。

→いろんなイベントを一緒に行いましたがどれも印象に残っています。その中でも事前準備に時間や作業などしっかり準備が必要なイベントなどは印象に残りました。

5 4.で回答した企画が最も印象に残っている理由を教えてください。

→前日から事前準備が必要な企画が何度かあり、そんなときでも自主的に遅い時間まで準備作業してくれました。

夏場のプール遊びの準備で大きなプールだったので前日から水を張るための作業や流しうどん用の竹の準備など、そういった責任感の感じられる所も印象的でした。

6 企画以外で印象に残っている瞬間を教えてください。

→チームくまもととして3年目になり一気にメンバーの人数が多くなったことに印象と驚きがありました。電話やメールでやりとりをしている中で急に20人を超えるメンバーで来ると聞いたときは、すごくビックリしました。ビックリと同時にそれだけの学生が熊本や被災地に興味を持っているのだと思ったことは印象に残っています。

7 6.で回答した事が印象に残っている理由を教えてください。

→いつも学生がお世話になっている住民の片山さん宅に全員寝泊まりできるか？とか移動時の方法などはすごく気になりましたが、片山さん宅でも全員宿泊もでき、住民の方たちともバーベキューをしたり子どもたちと遊んだりするのも大勢だと地元の人たちと一緒にいろんな話や遊びなどができたことも印象に残ります。

8

先日、チームくまもとの活動収束の報告を聞いた際の率直な感想を教えてください。

→コロナの影響もあり良いタイミングでもあるのかな、と思いました。

だらだらと継続しても実際に熊本に足を運ぶことも難しいですし、リモートなどよりも被災地として目で見て、住民の方と直接話して復興を感じてほしいので、コロナが収束、落ち着いた際にはチームくまもとという形でも違う形でも良いのでまた熊本を見に来てもらえればと思います。

9

東京から大学生がボランティアとして何うことについて率直なご意見をお聞かせください。

→わざわざ遠いところご苦労さまという気持ちもありますが、それ以上にありがたい気持ちもあります。かく言う私も熊本地震直後は神奈川からちょくちょくボランティアに訪れていました。熊本や九州に縁があったり何処か好きな場所や何か好きな物があって「行こう」という気持ちになって皆さんが来ていただいたのだと思います。これも何かの縁で良い経験になったと思います。

朝から車を運転をして私たちを活動場所まで運んで下さり、また、夜遅くまで私たちのミーティングに付き添って下さいました。私たちにとって現地の顧問の様な存在でした。ありがとうございました。





小森村営住宅（旧小森仮設団地 A 棟）自治会長 鈴川 将司さん

1 チームくまもとはどのようなきっかけで関わるようになりましたか。
→西原村のためにいろいろ計画して動いているのを見て、自分たちも協力してあげたいと思い関わるようになりました。

2 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。（活動内容について）
→はじめの頃はということをするのかなって思っていたが、住民の方ともしっかり関わって頂き元気をもらいみなさん個性があり良かったと思います。

3 関わり始めた当時に感じたことを教えてください。（学生の姿勢・態度について）
→正直な所、個人的には1人1人バラバラに動いて貴重な時間を使った方がいいと思うが、今後は別の所でもいかせるようになってほしいです。

4 チームくまもが行った企画の中で最も印象に残っているものを教えてください。
→お茶会、そうめん流し

5 4.で回答した企画が最も印象に残っている理由を教えてください。
→学生さんとコミュニケーションがとれたことで住民の方の笑顔が多く見られました。

6 企画以外で印象に残っている瞬間を教えてください。
→毎回来て頂く学生たちの変化や村の方との接し方がなれてきたこと。

7 6.で回答した事が印象に残っている理由を教えてください。
→見た目の印象がだんだん変わってきたので接しやすく明るくなってたので良かったです。

8 先日、チームくまもとの活動収束の報告を聞いた際の率直な感想を教えてください。
→“おつかれさま、ありがとう”という気持ちが大きかったが、終わるときいて残念な気持ち大きいです。

9 東京から大学生がボランティアとして何うことについて率直なご意見をお聞かせください。
→ぜひぜひ又、西原村に来てほしいです。私達は感謝しかありません。

学生の緊張を解き、活動に自信を持たせてくださいました。また、集会所のイベント会場としての使用を快く引き受けてくださいました。ありがとうございました。

私がチームくまもとに入った理由は大きくふたつありました。一つは、ボランティアに携わりたいと言う気持ち、そして、九州出身で愛着のある土地で活動できるという魅力に引かれたからです。特に印象に残っていることは2019年の夏活動です。初めての現地の活動で、それまではミーティング中心の活動をしてきた私にとっては、2日間の活動で刺激を受けました。

それ以降のミーティングで発言しやすくなり、質にこだわられるようになったと思います。2年生になってから、コロナで現地に行くことができなくなりました。徐々にボランティアに対してのモチベーションの低下を感じる時間もありました。しかし、オンラインでの活動報告により、諦めていたボランティアの新たな可能性を発見できました。これまでの経験を今後の学生生活につなげていきたいと思います。チームくまもとに入って、自分たちを「必要としてくれている」方々の温かい気持ちを感じることができました。ありがとうございました。

国際経営学部3年 藤田 寛之

第4章 卒業生、現役の学生の振り返り

チームくまもとでの活動を振り返って

木村 亘佑 (2016・17年度代表、2018年度法学部卒業生)



今回、中央大学ボランティアセンター公認学生団体「チームくまもと」の活動収束に伴い、以下の文を寄稿させていただきます。

私自身は、2016年5月から大学卒業の2019年まで西原村にて活動をさせて頂いておりましたが、今回の活動収束にあたりましては何よりも、温かく我々を受け入れ続けて下さいました西原村の方々に心より御礼申し上げます。至らない点多々ある学生を家族のように迎えて下さり、寧ろ多くのことを与えて頂きました。

熊本での震災(初震)が発生した2016年4月14日、熊本市出身だった私は東京で一人暮らしをしており、その時は自宅でテレビを見ていたことを覚えています。

テレビ画面の上部に映し出される緊急地震速報を見て、胸が強く締め付けられるように感じたことを覚えています。

—まさか熊本で大地震が

家族や友人との連絡もつかず、続々と入ってくる報道に大きな不安を感じていました。

私自身が被災をしたわけでは勿論ありませんが、2015年から東日本大震災によって壊滅的な被害を受けた宮城県気仙沼市の仮設住宅でボランティア活動を継続に行わせて頂いており、仮設住宅で暮らす方々から何う震災の恐ろしさは理解していたつもりでした。

しかし、改めて地元での被災や自分自身、幼少期から生活していた祖父母宅の取壊しなどを経験することで僅かですが、震災が与える現地の方々への影響を自分事として捉えることができました。

東北での経験をなんとか活かせないかと思い、西原村に最初にお邪魔させて頂いたのは5月の初めです。当初は大学が主催するボランティアツアーに複数の学生と共に参加させて頂き、足湯活動や農業ボランティア、住宅の片付け作業などをお手伝いさせて頂きました。それからは月に1回程度のスパンで定期的に西原村にお伺いさせて頂いておりました。

これらの活動は中央大学のボランティアセンターの職員の方の大きな尽力の元で成り立つ活動でありましたが、定期的に訪問しながら、西原村の方々からお話をお伺いする中で我々学生の中にも“課題意識”や“もっと学生が主体的に行動したい”と思う気持ちが芽生えたことで、「チームくまもと」としての学生団体の立ち上げを行うに至りました。

「チームくまもと」は、

- ◆震災によって住民の方々が住み慣れた地域から離れることによる古くから醸成されてきた地域コミュニティの損失
- ◆震災によるショック・仮設住宅への転居に伴う環境的ストレスなどを前提的な課題として、
 - 小森仮設団地のご高齢者さんへの足湯や訪問活動
 - 小森団地における集会所等を使用させて頂いたお茶会や子どもたちへのイベント開催

を当初の主な活動内容とさせて頂いておりました。

小森仮設団地から災害復興公営住宅への住民の方々の転居に伴い、活動の場所を少しずつ移りながらの活動ではありましたが、上記のような点を念頭においていたように思います。

冒頭でも記述させて頂いていた通り、これらの活動は学生のみで成り立つものではありません。お伺いする度に「また来てくれたんね。」と声をかけて下さる住民の方々や宿泊先を提供して下さる方々、我々の活動にご協力・アドバイスを下さる現地の方々などあっての活動でありました。

震災による被害は表面的には避難者数や被害住宅数など目に見える形によって表されますが、それらには必ず思い出や暮らし、人々との関わりなどが紐づいています。

震災はむしろそういった、目に見えない部分を奪い去ってしまうからこそ、なかなか言葉にしにくいような喪失感や欠落感を伴うものではないかと考えております。だからこそ、定期的にお伺いさせて頂く学生がお話を伺う中で、少しでも想いを言葉にして頂くことや、イベントを通してそういった経験を少しでも取り払う時間を作る事ができたとすれば、少しでも意味のある活動であったのではないかと思います。

我々学生としても、地域の方々から温かく受け入れて頂いた経験や、お話を伺う中で得た学びはかけがえのない財産としてこれからも残り続けます。

最後にはなりますが、改めてこれまでの「チームくまもと」の活動を受け入れて下さりまして有難うございました。団体としての活動は収束しますが、その後であってもふらっとお伺いして変わりなく楽しくお話できる関係が続けばと願っております。

今後の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



チームくまもと活動記念誌発刊に寄せて

大谷 夏子 (2018年度文学部卒業生)



現地で快く受け入れてくださった方々をはじめ、たくさんのお世話になった皆さまに、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

発災を知ったのは大学二年次、東京の祖母宅で見たテレビのニュースで、大変なことが起きたと思いました。

ボランティアセンター公認団体・面瀬学習支援に所属し活動を通して様々な方からお話を伺っていた分、今後どんなことが起きるかと思像した内容はある程度の鮮明さを持っていたと思います。同時に、どうにかして現地に行き何かしたいという衝動的な思いを抱きました。

コーディネーターの松本さんに尋ねてみると、今すぐに現地に行くような活動は考えていないこと、行けるようになったとしても九州出身の学生を中心に参加者を募る予定であることを教えてもらいました。ひとりで行くにしても、免許もなく現地で活動できるよう手引きを頼れる知り合いもない。結局、今のままひとりで行っても何もできないと結論付け、熊本行きをいったん諦めました。

六月に松本さんから「熊本に行く？」と声を掛けてもらいました。来月に木村さんと熊本に行くが、レンタカーで移動するにあたって席に空きがあるから来てみないかとのことでした。ぜひ行きたい旨を伝え、それからは既出情報を調べたり、なぜ・何をしに熊本に行くのかを考えたりしながら過ごしました。

七月十日、現地に着き、足湯ボランティアを通して避難所で過ごしている方たちとお話をしました。その方たちの表情や言葉は私に静かな衝撃をもたらしました。

公表されていた被害状況から考えれば、東日本大震災の被災地ほど復旧・復興に時間はかからないだろう、被災した方々も非常に辛い状況にあっても、この先、何とかなるとは思っているのではないかという考えを、被災地のために何か、という思いと同時に持ち合わせていたからです。

お話しできた方々はご自身の大切なものを失い、それぞれ異なる不安を抱えていました。俯瞰して見るとどうかという視点は何をすべきかを考えるうえで重要ですが、お一人おひとりの状況や感じていることを想像するにあたって安易に用いるべきではないという気づきは、その後の熊本での活動を考えていくにあたって大きなものでした。

団体を設立することとなり、翌年には藤原くんたち六人の一年生が新たに加入してくれました。熊本の産品をイベントで販売したり、仮設住宅を訪問したり、現地で活動をされている方のお手伝いしたり、様々な活動を行いながら、木村くん、恵良くん、先輩方と一緒に団体の理念や活動方針について話し合ってきましたが、果たして、藤原くんたちにそれをしっかりと伝えられたかは少し疑問が残ります。

それは当時のチームくまもとが年浅い団体であり、私(たち上級生)も十分に成熟していなかったために、実際の活動をもとに理念を決めるとき、どうしても実際から離れた言葉のやり取りになってしまうことがあったからです。私たちはこういう団体である、と決めたこととしていることがまだうまく地続きにならず、どちらもより適した形を探してすこしずつ変えられていた時期だったのではないのでしょうか。

そんな杞憂をよそに、私が在学中している間も卒業してからも、藤原くんたちは活動を通して、何をすべきと思うかを、それぞれに、またチームとして円熟させていったように思います。

現チームくまもとの皆さん、お世話になった方々とのつながりとチームくまもとの活動を引き継ぎ、意味のある形で閉じてくれること、本当に感謝しています。ありがとう。

復興支援で得た気付き

恵良 友貴 (2018年度文学部卒業生)



「被災地を忘れないことが復興につながる」。心理学概論という授業で山科満教授が口にした言葉だ。このフレーズ及び山科教授の講義で、私は被災地ボランティアに興味関心を持つようになる。

2016年4月14日夜、熊本で震度7の地震が起きた。できることはないか相談するため大学のボランティアセンターに駆け込み、有志数人で西原村の避難所で足湯ボランティアをする話が持ち上がったが、両親に「まだ余震が続いている。君が被災したら私たちの気が気でない」と諭され未遂に終わった。それでも何かできることをしたいという思いが強く、大学の食堂前やイオンモール多摩平の森で行われた募金活動に参加した。

9月末、募金活動に参加していた面瀬学習支援の大谷さんから「ホームカミングデーで阿蘇神社再建資金のための物産展をしないか」とメールをいただいた。現地に行けなくても、被災地を忘れないことが復興につながる。山科教授の講義を思い出し、私は大谷さんや、熊本出身ではまらいんや所属の木村君を中心としたメンバーで物産展に取り組み、「チームくまもと」の立ち上げに関わった。「チームくまもと」として最初に取り組んだことは、物産展での収益を被災地の社会福祉協議会に義援金として送る活動だった。当時の私は「被災した現場の生の声・感情を拾い、(現地を知らない人や別の支援者へ)つなげていくことが物産展ボランティアには求められると感じている」と報告書で述懐している。

2017年からは西原村の小森仮設団地へ2ヶ月に1度訪れ、集会所で企画を催し住民同士の交流づくりのキッカケを作る活動を行った。交流を促進する画期的なアイデアはあまり浮かばなかったが、全部分からないかもしれないかもしれないその人の姿や素振りを見聞きして理解しようとするのが、現地住民から被災者というラベルを剥がし、会話を弾ませるキッカケになることを現地住民との交流の中で学んだ。ボランティアを通じ、目の前の人間を尊重する心構えに気付けた。

大学卒業後、私は九州の百貨店に就職したが、「被災地を忘れないことが復興につながる」という言葉は今も胸に響いている。2020年8月末には福岡県内の豪雨災害の現場で家財搬出に携わり、被災された住民の言葉や意向を受け止めて作業した。誰かの人生の一部に関わることは容易ではない。けど見過ごせない自分もいる。だから手を差し伸べて様子を伺ってみる。被災地の人々を忘れずに、できることをできるときに取り組みたい。

私のチームくまもとでの4年間

藤原 凌 (2018年度代表、2020年度経済学部卒業生)



活動を受け継いで

私が1年生の時、当時3年生だった先輩方と共に西原村へ初めて行きました。ですが何もできず、何のために活動に行っているのか分からなくなってしまうことがありました。先輩方は現地の方々とお話を交えながら聞きたいことやその人のことをどんどん理解していました。私に足りなかったものは相手のことを理解する気持ちと、自分自身を伝えること、そしてリラックスすることでした。

活動を引き継いだ翌年からは現地の方々の優しさもあり、お互いを知ることができるお話が出来たと思います。現地の方々の抱えている本当の悩みと向き合うために、何度も訪問させていただき、私なりに考えたことを話して行動に移しました。「チームくまもと」としての私たちの活動が少しでも現地の方々の気持ちを楽しめることに貢献出来ていたら嬉しいです。

団体活動を通じて学んだこと

約4年間活動に携わらせていただく中で西原村の復興を感じました。ブルーシートが屋根を覆う景色から新たな建物ができあがっていく景色への変化、何度も訪問させていただいた方の表札にある空室という二文字。現地の方々が再建を目指す姿をこの目で見させていただきました。一方で私たちの行うコミュニティ支援というのは形で表すのがとても難しく現地の方々の悩みが即時に解決できることは多くはありません。自分たちの活動が意味することに疑問を浮かべることもありました。

しかし、1度や2度の活動ではなく継続的に西原村、小森仮設団地を訪問し現地の方々と向き合ったからこそ分かった変化があり、現地の方々の思いや復興を感じることが出来ました。復興は続きます。直接的に関わる機会は減少するかもしれませんが、1人のボランティア経験者として自分にできることを考えていきます。

西原村で学んだこと

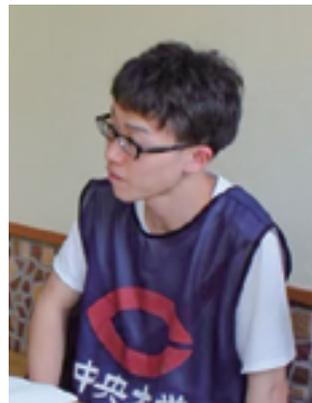
その土地を理解するというのが、その土地に住む方々を理解することに繋がりました。もちろん、自分自身で西原村のことを調べさせていただきましてしお話を通じて知識を吸収させていただきました。それ以上に様々な場所に連れて行っていただき、様々な体験をさせていただきました。時には私が本当にボランティアなのか分からなくなることもありました。その疑問とは裏腹にこれらの経験は現地の方々との会話の中で役に立ち、さらに西原を知りたいという意欲を生みました。活動当初に私が抱いていたボランティア像が変化していきました。意欲の変化が行動の変化を生み出し、自分自身の理解の成長に繋がりました。今後他の地域で活動する機会に恵まれたらその土地について興味を持つことから始めていこうと思います。

最後に

チームくまもとの活動は現地の方々に支えられ成り立つものでした。学ぶ機会を沢山いただき、一人の人間として成長することが出来ました。私たちの活動や存在が少しでも西原村の皆さんの記憶に残っていたら嬉しいです。本当にありがとうございました。また必ず西原村に行きます。

私のチームくまもとでの4年間

横山 直輝 (2020年度法学部卒業生)



チームくまもとでの活動

私が西原村の小森仮設団地に初めて行ったのは2017年の9月であり、震災から1年以上経過してからでした。当時の自分は住民の方と話す際、緊張のあまり声は小さくなりましたし、何を話したら良いのか分からずに立ち往生していたと記憶しています。とにかく右も左も分からない状態でしたので、何のために活動をしているのか十分な理解をする余裕もありませんでした。

活動目的、ひいてはボランティアをする意義について考える契機となったのは、後の活動での住民の方との会話からでした。その方は会話の中で「私が生きているうちに震災は起きて欲しくなかった。せめて私が死んだ後に起きてくれていたら・・・」とおっしゃっていました。これは1年生の自分には受け止めきれない程重みのある言葉でした。活動が終わり、東京に帰ってきてからもその言葉を頭の中で反芻していました。その結果このような被災者の思いを風化させてはいけなく考えるようになりました。それからの活動では、住民の方とお話させていただく際には「その思いを理解しようとする人がここにいます」と伝わったら良いなと考えながらコミュニケーションを取るよう心がけていました。

また学生ボランティアの本質はここに在ると考えます。学生は数ヶ月に1度しか現地で活動はできません。限られた時間の中で学生ができることは少ないかもしれませんが、しかし継続して現地に通い、対話を通して一人一人に寄り添おうとすることはできます。恐縮ですが、沢山の住民の方から「学生が来てくれて嬉しい」と言っただけの機会にも恵まれました。約4年間に及び活動させていただきましたが、その活動に意義を持たせられたのかなと思います。

活動を通して学んだこと

最も学んだことは「人との繋がり」の重要性です。私たちはこれまで戸別訪問や茶話会などのイベントを行ってきました。これは学生をいつも温かく受け入れてくださった住民の方々や、活動をサポートしてくださった現地の方々の協力があったものです。住民の方々とも対話を重ねて「人との繋がり」が生まれて関係性が構築されるからこそ、潜在的な問題やニーズの発見に至るのだと思います。

また「人との繋がり」を意識しながら活動をしていると、学生が住民の方々に対して1から10まで「何かをする(与える)」という一方的なものではなく、学生と住民の方々が「一緒に何かをする(与え合う)」、という双方向的なものがボランティアなのではないかと考えるようになりました。私はこの「人との繋がり」の重要性を実感できるようになってからは、どうしても難しく考えてしまうボランティアを、楽しいものとして捉えることができるようになりました。

最後に

現地の活動は我々学生だけでは到底成り立つものではなく、現地の方々の支えがあってこそのものでした。心より感謝申し上げます。チームくまもとの活動で学びえた数々のことは、私の価値観形成にも大きく関わっています。また、何より生涯の財産になると思います。本当に有難うございました

西原村でのボランティア活動で感じたこと

吉田 圭吾 (2020 年度法学部卒業生)



「人と人とのつながり」

私は西原村でのボランティア活動を通して、「人と人とのつながりの大切さ」を強く感じました。ここでは、特にそのように感じた2つのことを取り上げて記述させていただきます。

一つは、大切畑地区が「奇跡の集落」と呼ばれるきっかけとなった出来事を知ったことです。同地区では、本震により9名が倒壊した家屋の下に生き埋めになりながらも、一人の犠牲者も出さなかった背景には、「(要救助者の)家の間取りが(救助者の)頭に入っていた」という日頃からの住民同士のつながりがあり、迅速な救助が実現しました。この固い絆に感銘を受けるとともに、特に都市部で進む近所付き合いの希薄化は決して他人事ではないと考えるようになりました。

もう一つは、災害が発生する度に課題として挙げられる「孤立死」について深く考えたことです。西原村においては、震災から2年後に、県内で最初の災害公営住宅が完成するとともに、本格的な自宅再建や仮設住宅から民間賃貸住宅への移転が始まるなど、他の市町村に比べて早い復旧・復興の過程を経てきました。また他方で、仮設団地の集約にあたり団地内で住居を移動しなければならない人もいました。幸いにも、活動拠点としていた小森仮設団地では孤立死が出ませんでした。このような環境の変化が次第に孤立してしまう人を生み出してしまうのではないかと考えるとともに、コミュニティの重要性を再認識する機会となりました。

近年、個人の生活様式や価値観の多様化、社会環境の変化などにより地域コミュニティの衰退が進んでいますが、西原村での活動を経てコミュニティの価値の大きさを実感しました。ここで学んだことを忘れず、人と人とのつながりを大切にしていきたいと思います。

コミュニティ支援に臨むボランティアの姿勢

私は、鈴川さん(小森仮設団地A棟自治会長)の「自分たち(学生)が楽しむで良いと思う。自分たちがまた熊本へ行ったときに、自分たちが一つでも多く笑えるように行こうという気持ちで来てくれた方が有難い」という言葉を機に活動への姿勢が変わったと振り返っています。この言葉をかけていただいたのは1年生の冬でしたが、それまでの私は、活動毎に設定する目標を達成するにはどうすべきかを考えたり、仮設住宅の住民の方々に対して失礼のないようにと思うあまりに委縮してしまったりと、活動に対して慎重になっていました。しかし、それからは、戸別訪問や茶話会などのイベントなど住民の方々と接する際、第一にその時々を楽しむよう心掛けたことで、慎重に活動する際よりも断然会話が弾むようになり、また、次第にその方が抱える潜在的なニーズなど様々なことを話してくださるようになったと実感しています。

これは、言い換えれば「ボランティアと被災者」という枠組みを取り払い、相手と向き合うようになった結果だと考えています。もちろん、ボランティアをするにあたり「してあげる」のではなく「させていただく」という考えを忘れてはなりません。では、なぜ鈴川さんの「楽しむ」という言葉がこれほどまでに印象に残っているかを考えたとき、個人的な意見ですが、それは「させていただく」という気持ちが強すぎるあまりにそれが行動に現れてしまったりは、被災者の方々の気持ちの重荷になってしまったり、気を遣わせてしまったりすることがあるからであり、それを和らげる要素として「楽しむこと」が必要なのだと思います。また、そうすることで、良い意味で互いに気を遣いすぎない対等な関係性を築くことができ、ボランティア活動に不可欠な信頼関係が生まれるのではないかと思います。

最後に

2020年はコロナ禍により、残念ながら西原村で活動を展開することが叶いませんでしたが、それまでの3年間では戸別訪問や茶話会、流しうどん、プール遊びなど様々な活動をさせていただき、多くのことを学びました。これもひとえに、私たちの活動を理解し受け入れてくださった方々、サポートしてくださった方々のおかげであり、心より感謝申し上げます。ここで得た大きな学びは、今後の人生に必ず活かして参ります。有難うございました。

チームくまもとでのボランティア活動を振り返って

藤野 将希 (2020 年度法学部卒業生)



はじめに

私がこの団体に入った経緯は、もともと漠然と「誰かの役に立ってみたい」という思いがあったからです。しかしいざ参加してみると、それまでの自分が見てこなかった世界に足を踏み入れたようで怖く感じたことを今でも覚えています。薄い理由で入った自分が真剣に活動している人たちの邪魔になるのではないかと、現地の方々に対して失礼に当たるのではないかと、単なる自己満足のボランティアで終わってしまうのではないかと、このような思いが頭の中にありました。正直に言うと、1年の夏活動前まではこの不安は消えなかったです。夏活動に参加してみて、自分のふがいなさを実感したと同時に、本気になってボランティア活動に取り組みたいと思うようになりました。その中で私が得た学びや気づきを以下に記します。

活動を通しての学び

チームくまもとでの最大の学びは、「答えのない問い」に対する取り組みを多く経験できたということです。それまでの学校生活では、どんな難問であっても最終的には「答え」が用意されているものばかりでした。しかし当然ながら被災地ボランティアには「答え」や「正解」というものはなく、最終的には自分たちで決定しなくてはなりません。だからこそ、活動前にはあらゆる事態を想定して目標を立て、実際に実行し、それを改善していくことを徹底してきました。この団体に入っていなかったら意識すらしていなかったかもしれません。このPDCAのサイクルを意識することによって、ボランティア活動以外でもPDCAを回すようになりました。社会に出てもこの取り組みは私の資産になりうるものと考えています。個人的には社会人で本当に仕事ができる人は「与えられた問いに模範解答をする人」ではなく、「答えのない問いを見つけ出し、解決できる人」だと思っています。チームくまもとでの学びは後者の方で、私自身もそのような人材になりたいと考えています。

「対等な関係から信頼関係は生まれる」ということも大きな学びの1つです。上述のように私は「人の役に立ってみたい」と思い団体に参加しましたが、実際には私が得たことの方が圧倒的に大きかったように思います。初めは自分ばかりが学ぶことはいいのだろうかという戸惑いはありましたが、だんだんとそういった次元の話ではないということに気づきました。つまり「してもらう」、「してあげる」の関係ではなく、対等な関係だからこそ信頼してもらっているということです。もしかしたら私は、初めから「対等な関係は無理だ」と諦めてしまっていたのかもしれませんが。立場や環境が異なっても対等な関係は築けます。傾聴講座の中での「同感ではなく共感」という言葉がこの時初めて理解したような気がします。実際に住民の方から「中央大学の学生が来てくれることがうれしい」という言葉を頂いたときは本当にうれしかったです。人と付き合うときに初めから分かり合えないと諦めるのではなく、その人自身をより深く知ることが重要であり、それこそが対等な関係を築くことにつながるのだと身をもって感じることができました。

最後に

なんでも言い合える仲間に出会えたことも大きな財産です。時にはミーティングで意見がぶつかることもありましたが、それはお互いを信頼していたからこそそのことです。多くの時間を共にした仲間は、これからも一生付き合っていくと思います。これまで学んできたこと踏まえて、これからは生きていくこととなります。もちろんこれからも学び続けたいと思いますが、チームくまもとでの「学び」を自分の中の幹に据え、これからも精進していきたいと思っています。

チームくまもとでの活動を振り返って

滝澤 佑介 (2019年度代表、経済学部4年生)



活動について

初めて西原村を訪れたのは1年生の夏の活動の時で、その時はとても緊張していました。あまりにも緊張していたので現地の方に「そんなに緊張しなくていいからね」と言っていただいたことをよく覚えています。活動を続けていく中で西原村の方々とお話をする回数も増えて、また西原村に行って西原村の方々とお話したいと思うようになりました。2年生の時に団体を引き継いだのですが、その年の夏の活動の時にチームくまもとの活動の方向性を具体的に考えるようになりました。それは復興が進み仮設住宅の数が減っていくにつれて、チームくまもととして活動する時に西原村の方々とどのように関わっていくか考えるのが難しくなったためです。そのことに関してチームくまもとのメンバー間での話し合いや西原村の方々のヒアリングを行いました。その後様々な意見がでて何度も話し合いを行った結果、活動を収束することに決めました。私は団体でなく個人的に西原村に関わっていきたいと思っています。

活動で学んだこと

チームくまもとでの活動では西原村の方々と会話する機会が多くありました。初めの頃はあらかじめ決めていた聞きたいことを意識してしまいうまく会話することができませんでした。しかし活動を続けていく中で顔を覚えてくださる方や訪問先の住民の方から話していただいたおかげもあり、会話が続くようになりました。会話が続くようになってからは会話の内容だけでなく表情や話している様子などを見る余裕が出てきました。そのことにより言葉で表現されること以上に感情を知ることができたと思います。その時に感じ取ることができた住民の方の感情は会話の内容よりも深いところにある思いであり、その思いは自分たちの活動がどうあるべきなのかを考えることにおいて大切なものだと感じました。西原村での活動で私は会話の大切さを今まで以上に知ることができました。

最後に

活動で西原村を訪れる私たちを西原村の方々が温かく迎えて下さりとても感謝しています。私が西原村で活動させていただき学んだことは他では経験できないことが多くありました。この経験を将来生かしていきたいと思っています。

団体の収束とコロナ禍での活動

保崎 翔太 (2020・2021 年度代表、経済学部3年生)

西村 柚衣香 (2020・2021 年度副代表、文学部3年生)

佐藤 百夏 (2020・2021 年度副代表、法学部3年生)



1. 団体収束決定までの道のり

私たち3年生がチームくまもとに入った2019年の夏活動でこれまで続けてきた団体の活動は今後も現地の方々に対して必要であるのかという違和感を抱き始めました。そう考えるようになったきっかけとして、私たちが企画したイベントでのメンバーの固定化の様な私たちの現地の状況に対する認識や予測、それに伴って定めた目標などが現地の実際の状況とずれてしまっていたということが挙げられます。

そこで私たちは夏活動中のミーティングにおいて団体の今後の方向性について話し合いました。そこでは団体としての活動を終えるか否かといった話は勿論、活動を終えるならいつにすべきか、さらには被災地支援としての活動は終えるが地域おこしの様な活動に移っていくのはどうかといった話も挙がりました。

しかし夏活動中やその後の大学でのミーティングでは結論は出ませんでした。そこで私たちは11月にヒアリングを中心とした現地活動を行い、そこで得た情報を参考にして今後の方向性を決めようということになりました。現地でヒアリングを行った際、住民の方や支え合いセンターさん、現地でボランティアをされている方など、沢山のの方々から様々な情報を頂くことができた一方、私たちが用意していた質問の質やその他の質問やお話に関して反省すべき部分もありました。

11月の現地活動を終え、まず初めにメンバー全員が改めて今後の方向性について意見を出し合いました。それらをまとめた結果、“地域おこしの様な活動に移る”と“被災地支援の活動を終えたら団体としての活動を終了する”という二つの選択肢が挙げられました。なかなか簡単に決断できることではありませんでしたが、最後には後者の意見に寄ったものに決まりました。その後、被災地支援としての活動をいつ終えるのか、それまでにどのようなことを行っていくのかなどについて話し合いました。その結果、今すぐに収束の活動に移るべきということになり、団体の活動を収束するまでに現地へ足を運び、もう一度ヒアリングや戸別訪問を行い、今までお世話になってきた方々や住民の方々への団体の収束の報告を行ってから最後に改めてイベントを開くということに決まりました。

2. 収束の議論において大切なこと

先にも述べたように、収束についての議論では現在おこなっている活動スタイルのままでいいのかという議論から始まり、被災地支援活動から地域おこし活動に移行するか、被災地支援のゴールとはどこか、仮設住宅がなくなるまで活動を続けるか、などについて話し合ってきました。以下ではそのような話し合いを進める中で、考えるべき重要な点だと思ったことを2つ挙げたいと思います。

1つ目は、私たちは地域のネットワークの中の一部の存在、またはそれを外から補う存在であると認識することです。私たち以外にも社会福祉協議会の皆さんや民生委員の皆さんなどの元々地域に根差した見守り役の方々がいることを認識し、その上で自分たちは現地にどのような働きかけができるのかを考える必要があると思いました。

2つ目は、自分たちが現地でおこなってきた活動、例えば戸別訪問やイベント活動は何のためにおこなっているのかを振り返ることです。今までやってきたから、と同じ活動を繰り返すのではなく、一つの活動の目的を振り返り、その活動は今必要であるのかを再度考える重要性を学びました。

震災を忘れないという姿勢を見せるために長期的に現地に赴くことは重要であると感じています。ま

た、故・黒田裕子氏の「最後の一人まで」の精神を考えると、活動を終わらせることを躊躇してしまう面もあると思います。しかし、自分たちの地域の中での立ち位置、そして理念に基づいた果たすべき役割を把握し、現地の状況に合わせて活動を変えていくことが大切だと思いました。

収束の議論はなかなか終わりが見えず、たくさん悩み、時間もかかりましたが、その悩んだ時間から学べたことはとても多かったように思います。同じように被災地で活動している団体に少しでも参考になれば幸いです。

3. コロナ禍でのチームくまもとの活動

運営を引き継ぎ、収束へ向けて活動を始めた2020年3月、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により春活動は中止となり、スケジュール全体が先延ばしとなりました。そのため、それ以降のミーティングもオンラインとなり、また、活動自体もオンラインでの報告会や、メール等での定期的な連絡、お手紙やフォトブックの作成といった例年とは色の異なる活動となりました。その様な先の見えない活動の中で、当初立てたスケジュールを考え直さなければいけないのはもちろん、慣れないオンライン上での日々の活動には苦勞する点もありました。また、何と言っても現地を訪れることのできない歯痒さを非常に感じた1年でした。

例えば、オンラインミーティングでは、普段は当たり前にあるミーティング前の「雑談」が生まれにくいため、それがモチベーションに関わってくるようなこともありました。そういった点から、チームくまもとはSNS系や現地連絡係などの役割分担を早くから行い、モチベーションの維持に繋がればと感じることがありました。定期的な連絡では、現地の方と月に一回ほどメール等で連絡を取り合い、すぐに現地の方にお話しを伺うことが出来ました。しかし、それでは連絡先を知っている人にはアプローチできても、連絡先を知らない仮設住宅や公営住宅の住民さんとは繋がる事が出来ず、また、お手紙を送った際にも住民さんの反応を見られなかったことは残念だったように感じます。それでも、現地に行けないという制約がある中で、どうしたら西原村という地域のネットワークの一部となることのできるのか、それを考える姿勢を持ち続けて活動を行った1年であったと思います。

被災地支援ボランティアを行なってきた団体にとって、現地に赴けないということは、相手の感情や表情を見ることが出来ないということです。チームの理念として「人・地域・暮らしに焦点を当て、全体の中に個の居場所を作る」ことを掲げ、人と人のつながりを大切にしたいと活動を行ってきた私たちにとって、自身の無力さを感じる一年でもありましたが、その一方で、普段私たちの活動がいかに現地の方々、またボランティアセンターの方々を支えられているかを実感した1年でもありました。

私たちの学年は団体に入った年に収束についての議論をすることになり、分からないことも多い中、団体の方向性について考えてきました。そしてようやく結論が出たと思えばコロナ禍の影響によって思うような活動ができなくなってしまいました。振り返ってみると私たちの学年の中にはこの二年間は想像していたものと違ってたと感じている人もいるでしょう。しかし、想像していたものとは違っていただけからこそ経験できたことも少なからずあると思っています。私たちがこの二年間で経験してきたことは今後そう何度も経験できるとは思えません。だからこそ私たちはチームくまもとの得た経験をボランティアにとどまらず今後各々が進む道で生かしていこうと思っています。また、先にも述べましたが、今回の経験が今後同じ様な境遇に置かれた方々の助けになれば幸いです。

最後になりましたが、これまで活動を親身になってサポートして頂いた沢山の方々、そしていつも温かく迎えて下さった現地の方々へ心から感謝申し上げます。



私は活動を通して、誰でも普段は見せない、言えない気持ちを持って生きていることを強く感じました。それを解決することは理想ですが、簡単なことではありません。なので、思っていることを全て話してもらおうとするのではなく、少しでも話してみようかな、という気持ちになり、誰かに聞いてもらうことや暗い気持ちを忘れられる時間を共有することの方が大切なのだ、と感じました。

チームくまもととして西原村に伺わせていただいたことで、たくさんの方々に関わらせていただき、そしてお世話になりました。

団体の収束について、誰の気持ちを一番に考えるべきなのか悩んだことや、人と人との繋がりについて深く考え、向き合えたことは、私にとってかけがえのない財産となりました。本当にありがとうございました。

商学部 4年 甲斐 千尋

私がボランティアセンターの公認学生団体で活動したいと思ったのは、真剣に「ボランティア」と向き合いたいと思ったからです。チームくまもとはまさに、真剣に「西原村」と向き合う団体であると感じています。特にそう思ったのは、大学での毎週のミーティングです。大学という西原村とは離れた場所であっても先輩方は、西原村の方々、また現地での活動を常に意識してミーティングを行っていたと感じています。私自身、継続的に関わるボランティア活動は初めてであったため、その様な意識が抜けてしまっていた場面も、少なからずあったのではないかと思います。

しかし、2019年の夏活動が、「常に現地を考える」意識を強く与えてくれた場であったと認識しています。この夏活動で流しそめんのイベントを行った際、参加してくださる方が固定していることがミーティングの中で取り上げられました。そのとき私自身は、どうしたら皆さんに来ていただけるか、という視点でミーティングに参加していましたが、顧問の先生から、それは「ひとつの曲がり角だ」という指摘を受けました。これはまさに、「現地の視点で考える」ことであると思います。常に変化は起きていて、その地域の中で何が必要とされていて、私たちは今何ができるのか、改めて考えるきっかけになったと思います。

西原村の皆さまと関わることでできた時間は、自分にとっても、また団体にとっても非常に貴重で充実した時間であったと感じています。本当にありがとうございました。

法学部 3年 佐藤 百夏

私は被災地支援のボランティア活動に参加したいと思い、チームくまもとに入りました。

西原村での現地活動では、仮設住宅や支え合いセンターの方々などに様々なお話を伺うことができました。また、我々学生のどのような活動で西原村の皆さまに貢献することができるのか何度も話し合い、仮設住宅の集会所でイベントを実施させていただきました。現地活動中に仮設住宅に関することなどの被災地特有の問題だけではなく、地域の高齢化による問題も抱えていることをお聞きしました。実際に西原村に訪れたことで知ったことや感じたことも多く、現地活動でしか得られないことがあると改めて実感しました。

チームくまもとの活動では多くのことを学び、アウトプットするという貴重な経験をさせていただきました。チームくまもとに関わってくくださった皆様に心より感謝申し上げます。

国際経営学部 3年 井田 千尋

第5章 顧問の先生方から

チームくまもと顧問として

宮本 航平

(中央大学法学部教授・チームくまもと顧問)



私がチームくまもとの顧問として初めて現地での活動に参加したのは、2017年3月だった。東北でのボランティア活動を経験した2年生のメンバーが現地のニーズを探るヒアリングを実施し熊本での活動の方向性を議論する姿を見て、心強く感じたことを覚えている。

4月に1年生が参加し、チームくまもとの活動は拡大した。1年生が数度の現地活動を経験した頃に彼らの一人と交わした会話が印象に残っている。「休みの日は何をしているの?」と聞くと、「熊本に行くための資金を得るためのアルバイトです」と答えてくれた。3年生になっていた中心メンバーの熱い思いが次の世代の学生にも伝わっていることを実感した。

2020年に2年間の在外研究から帰国すると、チームくまもとでは、団体の活動を閉じることを議論していた。現地のニーズを自ら見定め活動のあり方を考えるという学生の主体的な関わりが、活動を閉じるという決断を可能にしたのだろう。

災害ボランティアのニーズは、この国のどこかに常にある。東北の経験が熊本で活かされたように、チームくまもとの経験が活かされることを期待したい。

阿蘇を仰ぎ見て

平山 令二

(中央大学法学部教授・チームくまもと顧問)



「チームくまもと」のメンバー、恵良君、大谷さん、木村君、それに宮本先生と熊本を訪れたのは、2017年3月17日から18日のことであった。17日には熊本県立大学や熊本学園大学で地震の全体像やボランティア活動についてお話をうかがった。18日には西原村小森仮設住宅で手分けして戸別訪問をした。気仙沼ボランティアの経験はあるが、戸別訪問は初めてだった。印象的だったのは、発達障がいのお子さんがまわりに理解してもらえない、と嘆いていたお母さん、自宅から眺める有明海の夕焼けがどんなに美しいか語った婦人の話だった。災害がかけがえのない日常を奪い、潜在的な問題を顕在化することを実感した。

私が熊本に行けたのは、残念ながらこの1回のみである。「チームくまもと」は第1世代のあとに藤原君始め第2世代、そして次の世代に確実に受け継がれた。壮大な阿蘇に見守られた皆さんの献身に感謝し、私も熊本との縁を大事にしようと思う。

西原村と関係者の皆さまに感謝します

中澤 秀雄

(中央大学法学部教授・2015-2020 年度中央大学ボランティアセンター長)



東日本大震災被災地で活躍していた木村亘佑くんの地元が地震に襲われた日、気仙沼・面瀬仮設住宅自治会長さんは「気仙沼のことはいいから熊本に行かせてあげて」と電話をくれました。

その後足かけ5年間活動を継続し、西原村の皆さんに本当に良くして頂けたのは、チームくまもとに集った歴代学生の人柄と頑張りによるもので、心から拍手を送ります。西原に定着する際、被災地 NGO 協働センターの村井雅清さんと頼政良太さんの存在が重要でした。

活動が始まってからは、支え合いセンターや社協、宇治さん夫妻を始めとするボランティアの皆さん、そして仮設住宅や災害公営住宅の皆様にお世話になりました。ボランティアセンター長として、また一時期顧問を務めた者として、心より御礼申し上げます。いつも大人数がお世話になった片山さんご夫妻には感謝の言葉しかありません。

最後に、チームマネジメントに尽力した各期のリーダー学生に改めて拍手を送ります。

一人ひとりの想いが詰まったチームくまもとの活動

開澤 裕美

(中央大学ボランティアセンター コーディネーター)



熊本地震の発災直後に、卒業生の木村くんがボランティアセンターに来て「地元のために何かしたい!」と熱い想いをぶつけてくれたこと、よく覚えています。事情があり発災直後は現地に行けなかったけれども、何か違う形で地元貢献したい、と熊本応援物産展を一生懸命準備していた恵良くん、被災した子どもたちのためにできることは何かと抜きんでた行動力を発揮した大谷さん。先輩方の想いを受け継ぎ、チームワークで活動を拡げていった2020年度の卒業生の皆。活動の終わりを意識し始め、迷いながら走った4年生。そして、団体に入って間もなく、議論に議論を重ね、活動を終わるという大きな決断をした3年生。一人ひとりがそれぞれの想いを持ち、丁寧に活動に関わり続けた姿を見守る立場として、この記録集の完成まで至ったこと、感慨深い思いでいっぱいです。

これまで大きなご支援をいただいた熊本の皆さま、財政面で支えてくださった助成団体の皆さま、顧問の先生方、関係者の皆さま、多くの方々から心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました!

チームくまもと活動記念誌
～ 2016 年より西原村と歩んだ 5 年～

著者・発行者 中央大学ボランティアセンター公認学生団体 チームくまもと

〒 192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

TEL 042-674-3487

Twitter @ CV_kumamoto

E-mail chou-volunteer-grp@g.chuo-u.ac.jp

HP <https://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/>

発行日 2021 年 4 月 30 日

